

レジリエンスの獲得

2023・1・25 重枝 一郎

皆さんも「耳にタコ」だと思うが、新学習指導要領の総則での「主体的・対話的で深い学び」というワードがある。これは、高校生がキャリア形成の視点を持ち、毎時間の教科の授業において、目標を持ち、見通しや仮説を立てながら学習に取り組むことや、自己と向き合うことを含めた対話などの、探究型の学びを経験する中で自律型学習者に育っていくことである。

このことは、今年度初めの「校長研修だより51・決める経験」の配布の際「これは肝入りだからしっかり認識してほしい」とお願いした。そして、今回再度先生方をお願いする。

私は、昨年度就任当時に「先生方の多様性は保障する。ただ教科指導等の大枠を外部に発信する一体感に協力してください」と伝えた。そして、生徒・教師共に“ひとりにもなれる（主体性・多様性）、ひとつにもなれる（協働性・一体感）”というキャッチフレーズで発信している（年度初めのリーフレット参照）。先生方の中にはこの言葉をよく再現して学級で話してくれている人もいる。感謝である。

今回のお願いは、“**ミッション AL**”の生徒への周知と“最上位の目標は**自律型学習者である**”の2点である。このことは、私はあらゆるところで発信していることもあり、先生方の再現性を今一度お願いしたい。

このことは教科だけの話ではない。教科外つまり学校行事、生徒会活動、清掃活動、部活動においてもである。つまり全教育活動で求めている。生徒は例えば数学の時間には自分の考えをつかって他者と交流することはできなくても、部活動の時間には自分の意見を他者と交流し考えを深めることができるかもしれない。その逆もある。何がきっかけで主体的・対話的になる楽しさを知るかはわからない。生徒はきっかけがあれば、学びたい思いを発露し、自分の学びをデザインしていく。その内発的動機を促す学びの場と機会はすべての教育活動に求められる。だから、私は「全教育活動で筋を通した実践をしていく」と言っている。

よく聞く話として「教科指導のスタイルはエキスパート型で、探究学習もそうでなければならぬと思うと負担感が大きい」と聞く。探究学習は、特に生徒を自律型学習者に育てることが目的になる。それと同時に、これまでの教師の指導方法の変化も求めている部分もある。探究学習はその意義から考えても教師は進行役であるべきで、エキスパートである必要はない。それが探究学習を継続するコツでもある。

私は、探究学習を教科外の指導法から学ぶのがいいと思っている。部活動指導法や道徳指導法、特別活動指導法などから多くのヒントを得ることができる。そして必ず自身の教科指導改善工夫にもつながる。

私が考える探究学習の意義は「高校生活の間に1回でも考え抜いて楽しかった経験をすること」と思っている。そしてこのような経験は、生徒自身が先の人生を生きる上でのレジリエンス（折れない心）の獲得につながると思う。